

総説

「靴紐の結び方を文章で説明せよ」

—看護学生のためのコミュニケーションのワークショップが示唆してくれたもの—

Describe in writing how to tie your shoelaces

—What a communication workshop for nursing students suggested—

本間也寸志¹

抄録

【実施した課題】「靴紐の結び方を文章で説明せよ」という課題を、「コミュニケーション入門」という一年次の演習で実施した。合議によって解かせ、点数は原則として連帯責任とした。

【結果】「(先行するグループのメンバーの意見に賛成する場合)価値のある意見とは何か」「詳しく説明すると、普遍性のない特殊な説明となる」「修飾語句の用法など国語固有の原理に留意しないと誤解を与えてしまう」などの多くの問題提起や知見を得たが、「詳しく説明しよう」「ありのままに書こう」「具体的に書こう」など、学生たちが今までの人生で内面化してきた方針は役に立たないどころか、弊害があることがわかった。

【今後に向けて】特筆すべきことは、良い意見を出したかどうか、偏差値的な国語の成績と無関係だったということである。日常的な言葉の運用は、現在行われている大学入試を意識した国語教育とは無関係なところにある。国語教育のカリキュラムの見直しが必要である。

キーワード: 説明、看護学生のために国語教育、価値ある意見、視覚表象の言語化、
偏差値教育の欠陥

はじめに

「靴紐の結び方を文章で説明せよ」

筆者が湘南鎌倉医療大学にて担当している「コミュニケーション入門」(前期修了一単位一年次あたり2クラス)において、2020年度、2021年度の二年にわたって本学の一年生を対象に、グループの共同作業(いわゆるワークショップ)の課題としてこの課題を出題した。説明と

は何か、説明にまつわる日本語の諸問題や空間の把握方法などに多くの問題提起をもたらし得るものは大きかった。その知見は複数のジャンルにまたがるものであり、語りつくすことは難しいが、説明という実務的行為、特に医療従事者がクライアントに対して行う効果的な情報提供の方法を考える際、等閑に付すのは、もったいない。問題提起も含めて得たものを報告する。

受付日: 2021 年 11 月 29 日 受理日: 2022 年 2 月 2 日

1 公益財団法人無窮会 東洋文化研究所 / 湘南鎌倉医療大学 非常勤講師

homma970067@yahoo.co.jp Yasushi Honma

準備を進めている間に、思わぬアクシデントがあった。2020 年の前期の演習が始まる前に、新型コロナウイルスによる肺炎の蔓延により、遠隔の授業が導入されたことである。Office365 の Teams の機能を使ったグループチャットを導入することになった。大学一年生であるメンバーが、気心が知れるどころか顔と名前が一致する前であった。「コミュニケーション入門」は、第四講～第五講までは、グループチャットを行い、第六講になってリアルではこれまた初顔の筆者の講義を聴くことになった。

本稿は、2020 年度グループチャットとグループチャットの後の討議、2021 年の対面でのグループ討議を観察した結果得られた知見の報告であるが、主として遠隔による討議と対面での討議の二種の討議が行われ得られるものも多かった 2020 年度の演習を中心とした。示唆として得られた成果が所属するジャンルは、言語学の語用論、教育学、国語表現、位相幾何学など多岐にわたり、国語国文学・日本思想史専攻の筆者の手には余る学問分野も多い。したがって、本論も総説という形を取った。また、二年間で 150 名程度の学生しか対象にしておらず、大規模な調査は不可能であるので、数量的な分析はしないこととした。教員など主催者向けにワークショップのやり方を説いた本は、一様に「振り返り」を推奨している。しかし、振り返りは、こちらが単位認定の権限を握っている以上、感動の押しつけとなり、世上、批判されている読書感想文と同じことになりかねない。主体的自主的な学びが必要な大学という場で感動を強制された(と感じた)ら、シャレにならないから、振り返りは課さなかった。

1 課題のルール

① 写真や絵などの図像は、使用しない。

図像性を重大な性質として持つジェスチャーや顔の表情の使用も禁止する。理由は、次の二点である。

a 顔の表情やイントネーションなどは記録が困難であり再現性が乏しい。さらに良いものにしていくというその後の作業が困難であるからである

b 看護師は電話などにより遠隔地の患者やご家族などに器具の使い方を説明しなければならない。特に、島に一つしか診療所がなく、医師看護師の数が少ないが面積が広い島嶼ではしばしば起こることであろう。ビデオ製作には手間と時間がかかるから、使用頻度が高い器具の使い方のビデオを作るのがせいぜいであり、全ての説明がビデオでできるとは思えない。仮にビデオがあったとしても、言葉による説明の補助も必要であるともいえる。

② 靴紐は、あらかじめ、靴の穴(ハトメ)に入れられている。

紐は、靴にセットする前は、一本の長い、文字通りの紐状のものであるが、中間部分は靴に納められている。その両端が靴の左右の一番下の穴から10cmほど出ている状態からスタートするものとする。

完成時の姿は、団子結びなどほどこにくい結び方でない限り、いわゆる蝶々結びであっても縦結びなどであっても構わない。このルールを採用した理由は、蝶々結びと縦結びの区別が高度に過ぎること、この有名な二種類の結び方の他に多数の結び方があり、どれを採用するかも考えてほしいということ、むくみが出た人の靴を紐靴に替える、腰痛の人に紐式のコルセットをつけてもらうなど実用に供する場合、機能は同じであるからである。

③ 説明する相手は、中学生2年生程度の国語力を持つ人とする。

常識や推理能力は、授業をろくに聞かないまま中卒で学業を終えた方でも、社会に出てから身に付くが、難解な語彙や複雑な構文を理解する力はそうはいかないからだ。

④ 成績はグループの点数を各自に与えるものとする。

他人に意図を理解させられるような答案の作成もコミュニケーションであるが、答案を作るためのグループの仲間との話し合いも重大なコミュニケーションだからである。医療の現場に即して敷衍すると、患者や家族とのコミュニケーションに先だったあるいは並行した医療チームでの話し合いを実りあるものにすることが重要であるということである。

また、この採点方法によると、良い案を出したが結果的にコミュニケーションに失敗したという場合、失敗したという評価となる。エースが好投した野球の負け試合が負けは負けであるのと同様、失敗は失敗だからである。将来のために、そういう結果責任の考え方を身に着けてほしかったからである。アイディアの良し悪しというよりは、グループ内のトラブルを仲裁するなどグループのガバナンスに特別貢献した人に対して、例外的に加点する場合もあった。口論などのトラブルはなかったが、2020 年では、話題が多方面に分散した議論を要約して論点を明確にした学生には加点した。

2 道具としての電子会議室と、グループのガバナンス(統制)や人間関係

Teams は電子会議室である。司会を決めて司会させ、担当者(私)は観察し必要な場合にはアドバイスする。その過程で次のような観察を得た。

① 禁止しないと「××さんと同じです」という発言に終始する学生が出る。

日本社会は同調圧力が強く、中学や高校では他の子どもたちと異質なものがいじめを受けるという指摘がある。発言しない方が無難だ、他人の目の前で発言すると恥ずかしいといった問題もあると想像されるが、実験心理学では「アッシュの同調実験」^(注1)とされている有名な実験がある。二枚のカードの線分を描き、「左のカード」にある「線」と、同じ長さものを「右のカードの中から選び出さない」という単純な問題を課すのだが、いわゆるサクラの意見に左右され、サクラ(すなわち赤の他人)のまちがった意見を内面化してしまう、つまり、本当にそう信じ込んでしまうという現象が観察されている。アッシュは、「通常状況では、同じ長さの線分を回答する課題で間違える人は1%にも満たない。しかし、集団圧力がある場合には、選択の 36.8%で、少数派である参加者は多数派による誤った判断を受け入れた」^(注2)と結論付けているが、被験者はアメリカの大学生である。同調は日本人固有の現象でもなければ羞恥心などの理由に帰せられるだけの問題でもない。

また、同調の問題だけではなく、評価の問題もあった。

② 「まちがった発言は減点しない。発言しない人や『××さんと同じです』という発言しないのも同然の人は減点する」と述べたら、目に見えて発言が増えた。

別のワークショップで、いわゆるブレインストーミングを実施したが、成果を挙げるコツは、意味がないアイディアやまちがったアイディアであっても、いかに多くのアイディアを出すかにかかっている。むしろ、まちがったアイディアを口に出して前景化することにより、まちがいに気が付き、それをきっかけとして良いアイディアが出る。ところが、最初は、学生たちの口

は重かった。日本の小中学校では計算間違いや誤字が忌み嫌われていて、まちがいを犯して減点されないように慎重になるという態度が染みついているからである。その理由は、文系児童学のジャンルでは本田和子氏^(注3)や河原和枝氏の指摘がある。河原氏は、「わが国において<子ども>はまず、建設されるべき近代国家を担う国民の育成をめざして、義務教育の対象として、制度的に生み出されたということが出来よう」^(注4)と総括している。明治期の日本という新興近代国家で、なぜにまちがいが忌み嫌われたのか。富国強兵のスローガンの下、軽工業労働者が今でいうマニュアルを理解し、職長と適切なやり取りをして繊維製品の品質を高めるということが「富国」であり、兵卒が命令を読解し、歩哨に立って見たものを適切な言葉で報告し攻撃を有効なものに練り上げることが「強兵」であったからである。こうした減点法による教育は、紡績製品の輸出や歩兵の銃剣突撃にはよかっただろうが、決定的に時代遅れであり、アイデアを増やすには不向きである。今回のような手本やマニュアルがない説明文の創作にはアイデアがぜひ必要であるから、ミスを避ける習慣づけはむしろ有害無益なものである。

③ 相手の発言を遮ったりバカにするなどのことはなかった。

さすがは看護を志す学生だと思ったが、友人や仲間やクラスを過度に尊重してよそ行きの対応をする昨今の風潮によるものかもしれない。また、高等学校や予備校などで、集団面接の心得としてよく教えられているから、気を付けていたかもしれない。

④ 返信待ちについてのルールが、明確ではなかった。

別のワークショップで、「ディベート」を実施し

た。テーマは「LINE などの未読スルーについてどう思うか」である。学生は女子が多い十代から二十代の若者である。LINE をよく使い、ネットのリテラシーが高いはずの彼らの間でさえ、未読スルーの評価は定まっていなかった。このワークショップでも七人一組で Teams のグループを組んだが、a君の提案に対してみんながなかなか返信を寄こさなかったのも、司会者が全てのメンバーの返信を数日も待ったというケースが見られた。

そこで、新しいツールができれば、今までのルールを援用するというアドバイスをした。たとえば、電動キックボードには、原動機付自転車のルールが適応される。新しく出現した制度やモノに対しての既存のルールの類推適用は、ヨーロッパで自家用車が馬車、オートバイが馬とみなされて以来、延々と続いていることである。だから、Teams の返信は、待ち合わせと同じに考えればいい。スマホのない時代に大学生が駅で待ち合わせる場合、相手が来なくても待ち時間はせいぜい三十分から一時間。電車の遅れなどを考えてもその程度あれば、待ち合わせ場所に行くことが出来るからだ。Teams の場合、置いて行かれて議論が進んでもすぐに追いつくことが出来る。また、みんながスマホを持っているから Teams をチェックできないのは講義の時間だけである。休み時間は移動などで忙しく連絡できないかもしれないが、それでも90分二コマの前後の合計三時間半程度で十分である、とアドバイスした。もちろん、あらかじめ返信がない場合の議事進行について決めておくことは有効である。対面での場の雰囲気や伝わり合い Teams のわずらわしさと言えるかもしれないが、一方、Teams には良い点もあった。

⑤ アイディアの発案者が誰か一目瞭然であ

った。

連帯責任であり結果責任であるということは理解しても、やはり、自分の功績を誇り、著作権のように守りたいというのは、人情である。

たとえば、Aさんが「車で行った方が早い」といい、Bさんが「タクシーに乗った方がいい」と言い換え、このアイディアが評価され、最終的にBさんの手柄になってしまうケースがある。SNSにはよくあることである。声の大きな者の手柄になり、消極的な者は、恨みを募らせる。だからこそ、人間関係を円滑にするために、議論を停滞させるだけの無価値な褒め合いなどが延々と続くのである。あくまでも私の印象であるが、誰の手柄であるかという点をメンバーは気にせずに済んだようだった。

⑥ 無駄な繰り返しを防げた。

前の意見が蒸し返され、無限ループするという現象が起きなかった。Teams が、今までの議論展開を記録したメモ帳の機能を果たしているからであろう。

3 価値がある意見とは何か。

グループで討議させると、当然、性格的に活発であり学力が高い人と、そうでない人の差が際立つ。そうでない人は、いきおい、「〇〇さんの意見に賛成です」という発言に終始しがちである。1-②で述べたように、それでは、意見を述べたとは言えない。

しかし、本当に賛成の場合、たしかに、「〇〇さんの意見に賛成です」と言う以外にないのではないかという問題が起こる。そこで、意見とは何かという説明を担当者である私がしなければいけなくなった。

元の意見を、A → B とする(「→」は、「…ならば」「従って」などを指す。)A,Bは、それぞれ概念でも事態でもいいし、命題でも「主格-

述語」を備えた文でもいい。少々古いが、「オリンピックを開いたら、コロナが蔓延するだろう」という意見を例にとろう。「オリンピックを開く」がA、「コロナが蔓延するだろう」がBに当たる。

この元の意見に賛成しながらも、単なる繰り返しではない価値がある意見は、元の意見と以下のような関係に当たる意見である。

<Aの前にある条件>

「オリンピック選手や関係者の隔離が完全ではない以上、」

<Aの内容の説明>

「オリンピックは当事者能力がない政府与党が開くものだから」

「オリンピックを東京というコロナ流行地で開く限り」

<A.Bの中間>(理由やつながり、状況証拠など)

「密になり」

「気が緩み」

「運動選手と一般人の間の不公平感が生じて、ルールを守る気がしなくなり」

「どうせ、外人選手は日本人と違ってルールを厳格に守りっこないから」

「イギリスのサッカー観戦もそうだったから」

<Bと同様のもの>(Bと同一ではないがBを補強するもの)

「新しいウィルス変異が起こるだろう」

「現政権の人気取りになるから、総選挙に与党を勝たせてしまい、ますます、有効なコロナ対策が打てなくなる」

「予算を使うから、コロナ対策に金を回せなくなる」

<Bの次に来る結果>

「コロナが蔓延しても、集団免疫を獲得することはありませんから、国民の健康を害するだけである」

「稚拙な防疫体制を世界に見せつけて、日本は国際的な評価を下げるであろう。」

このうち、 $\langle A, B \text{ の中間} \rangle$ (理由やつながり) に関しては、理由やつながりを α 、 β 、 $\gamma \dots$ とすると、「 $A \rightarrow \alpha \rightarrow B$ 」となり、 α 、 β 、 $\gamma \dots$ は、数学のグラフ理論における経由点ということになる。ところがこの先が問題である。グラフ理論は、「 α 、 β 、 $\gamma \dots$ は有限であるか無限であるか、何通り考えられるか」などということを主題とし研究の目標とするしかない。 α を提示することがなぜ意義があるのかという問いの解答は得られそうもないところが問題である。

また、語用論は、研究の意義の有無に論理展開という形式から解明したものとは言えないので、ただちに意見の意義の有無の判定に応用できるものではない。語用論の基本的な書物である、D. スペルベル、D. ウィルソン 著『関連性理論—伝達と認知—』^(注5) は、関連性という概念から言説の意義を評価しようと試みている。たとえば、今、この本を読んでいる状況について考える場合、「1881 年 5 月 5 日は、カブールはよく晴れた日だった」は、全く現在の問題と関係がない、「今、あなたは本を読んでいる」は、現状とイコールであるから意味がないなどとしている。しかし、今挙げたオリンピック反対論において、「小池都知事は緑色の服を好んでいるから」などという、明らかに意味のない補足意見が出たとする。小池都知事と彼女の服は関係するから、関係のあるなしで意義を切り分けることは出来ない。もちろん「服の色は政策とは関係がないから」という意見は、内容を理解した上での結果論であり、下世話に表現すれば、後出しジャンケンである。管見の限り、論理展開という形式の研究は端緒についたばかりであるように思う。

自画自賛するようだが、賛成意見の場合も、

上記の、「 $A \rightarrow B$ 」という矢印の形式とどうかかわるかという着眼点から述べると有意義な発言ができるという事実は重大であり、たたき台にはなるはずであるので記した。どのようなジャンルからこの問題が掘り下げられるか、今後の研究が楽しみである。

4 解答例

解答には、「わかりやすい」「正確であり再現性がある」の二つが望まれる。この二つを満たした答えを出した。もちろん、暫定的なものであり、唯一の解答でもなければ完全な解答でもない。学生には口頭で説明したので、実際の説明と少し違う場合があるかもしれないことをあらかじめお断りする。

(1) 二本の紐で靴の上に×点を作る。(図1)



(2) 上の紐の先端をつま先側に折り、下の紐を巻き込むようにして、(1)の交点の下をくぐらせる。(図2)



(3) 二本の紐を引っ張る。そうすると、靴の上によじれができる。(図3)



(4) 左右の紐のそれぞれ先端と靴に近いところを合わせて持ち、左右の紐を雨滴状の輪にする。

(5) (4)で作った雨滴上の輪を靴の上で交差させて、(2)のように交点の下をくぐらせる。(図4)



(6) 雨滴の輪を引っ張り、抜けないように縛る。(図5)



5 代表的な失敗例と教訓

出来がった学生の解答をみると、失敗例こそが大変興味深く示唆に富むものであった。以下、代表例を報告する。a「……」が、代表的な失敗であり、後ろに添えた(1)などは、3 模

範解答 の説明と対応する。たとえば、(1)は、(1)を説明しようとして陥った失敗の一例である。

失敗例から導き出された教訓を記したが、決して、教訓一～教訓十は順につながっていくような内容ではない。つながりは複数考えられるのであえて示さなかった。各教訓はバラバラに読んでいただいて結構である。

a「紐が蝶の翅の形になるようにして、抜けないように結ぶ」(1)～(6)

もちろん、この文章は結び方の説明になっていない。「蝶の翅の形」になるようにするにはどうしたらいいか、「抜けないように結ぶ」には、どうしたらいいかを答えなければならないからである。別の表現をすると、「蝶の翅の形」という表現は、コンピュータ・サイエンスやAI研究などでいうところのブラックボックス^(注6)である。

教訓一 ブラックボックスの中に踏み込んでいないと、説明にならない。

中学生～高卒生までを塾や予備校で教えた経験がある人ならわかると思うが、ブラックボックスの中に踏み込まないのは、表現能力や国語力の低い人というより低学年の生徒の特徴である。低年齢の人は当事者意識が乏しい人が比較的多い。相手の立場に立っていないからブラックボックスの中に踏み込めないのだが、思いやりの心が足りないなどの倫理道德の問題ではなく、相手の要求の趣旨がわからないという一種の社会性の問題であろう。

ところが、現代では、社会や科学技術の複雑化に伴って、ブラックボックスに踏み込まず、外側から筋道をなぞるしか、物事を説明する方法がないケースが多くなっている。だから、大人になった我々にとって、決して卒業済みの問題とはいえない。よい例が、パソコンであ

る。「パソコンを使って昨日書いた文書の校正ができるのはなぜか」という問いがあったとしよう。「キーボードを使って打ち込んだデータは、CPUを使って処理され、メモリに一時記憶され、ストレージに保存され…」というように説明するしかない。筆者を含めた圧倒的大多数の人は、CPUやメモリやストレージの中がどうなっているか知らないからだ。また、原理を熟知している専門家にしても、一々説明するのは現実的ではないから、経過をブラックボックス化して同じように説明するしかないのではあるまいか。

もちろん、だからといって、現代人が幼稚になったわけではない。問題は、外面をなぞることと終始せざるを得ない現代社会の複雑化にどう対抗するかである。そして、その陰画としての「オタク」にどう対抗するか。問題^(注7)はまだ始まったばかりである。

b「左右の紐を合わせて靴の上で円を作る」(1)

出来上がった円の姿をたったこれだけの表現からただちに連想することが出来ない。したがって、聞き手は、図xのようなものを想像してしまう恐れがある。「合わせて」という表現が曖昧なのである。



図x

また、二本の紐を交差させて円を作ることが出来た人も、「円」と述べている以上、その丸みが重要だと思い、相手は厳密な円を作ろうとするかもしれない。

国語学的にいうと「円を」は「作る」にかかる連用修飾だからである。

教訓二 連用修飾(と連体修飾)には限定と描写の二つの用法がある。描写のつもりで書いたものを限定と誤解されないようにしないといけない。

この原則は重大である。入試問題などのポイントになりにくいところだから、忘れている、あるいはそもそも小中学校で指導されなかったという学生がほとんどである。限定の用法と描写の用法の比率や頻度が気になるが、難しいのは、この両者の区別は付けがたいというところである。たとえば、「この喫茶店の奥のボックスでコーラを飲んでいる人が、私の叔父です」という文章を考えてみよう。「コーヒーやジュースを飲んでいる他の人ではなく、コーラを飲んでいる人こそが、私の叔父です」という限定にも取れる。しかし、喫茶店のボックスに一人しか客がいない場合などは特に言えることであるが、叔父の姿をただ描写しただけとも受け取れる。だから、比率の資料は、信用に値するものは作られていない。

従って当面は、
「破水したら、タクシーでお越しください」(救急車の使用はご遠慮ください)
「菓は満腹時に飲んでください」(空腹の時に飲むのはお勧めできません)
という例から、限定と取られる恐れ、すなわち「円にしないと紐は結べない」と解釈される危険性があることを肝に銘じるしかない。

察しのよい方は、「何を言うか。×点だって同じではないか」と考えられるかもしれない。しかし、そんなことはない。×点の下は、三角になっても○になっても潰れた台形状であってもいいのであり、あらゆる形に当てはまる。言い換えれば×点は、あらゆる結び方の

説明になっている説明(数学的にいうと、「現実のさまざまな結び方と同値であり必要十分条件である説明」)なのである。しかし、「円を作る」はそうではない。円以外の形状には当てはまらない。だから、説明として失格である。さまざまな結び方のバリエーションの一つを述べているにすぎないからである。次の教訓も大切である。

教訓三 説明は現実の全てのバリエーションに当てはまる説明でないといけない。

c「右の手で右の紐の上三分の一あたりの場所を外れないようにつかみ、それを、右の紐下三分の一あたりと合わせて…」(4)

一見して冗長な説明であるとわかる。自分が紐を結んだ時の特殊な体験を描写しているだけだからである。この描写(説明)は、全ての正しい結び方に当てはまる説明ではない。だから、上に述べた教訓三に反する。

それにしても、この冗長な説明はどこから生まれたか。詳しく書けば書くほど正確になると、小学校か中学校などで習ったのであろう。詳しく書くと個人的な体験の描写、要するに普遍性に欠く説明となり、先ほど「同値」という言葉で説明した全ての事態に当てはまる説明ではなくなる。

小中高校生の段階では、確かに、詳しく説明することが重要であろう。また、詳しいだけでは説明にならないと教えても、生徒は混乱するだけであろう。しかし、何ごとによらず、小中高校生向けの指導は、高等教育以降、害になることがしばしばある。たとえば、国語の授業で「本文に書いてあることだけから考えなさい」と言われ、それを真に受けたら、広義のカルチュラルスタディーズを主要なパートとして成立している、大学以降の国文学の講義は成立しな

くなるであろう。世間では「高大接続」とはいうが、落差を埋めなければならないのは、微分や対数や質量などの概念が理解できない、計算力や文章力がないという学力だけではない。学問の方法や意義(到達目標。この場合は、相手に伝わるかという問題。正直に熱心に説明したかどうかという感情論と混同してはいけないのは言うまでもない)、学習者のスタンスも克服すべき落差である。

また、詳しい説明が冗長になる理由は、わかりきったことを説明してしまうからでもある。「外れないようにつかみ」などは、当たり前のことであり説明の必要はない。

教訓四 共有するコンテキストを描写することは、多くの場合、全く無駄である

d「二本の紐をよじり合わせる」(1)

これも一見してわかりにくい説明である。よじり合わせる位置や向きが不明であるから、たとえば、図yのような形を想像させてしまう。他の空間との位置関係や向きがわかるようにするべきである。



図y

e「二本の紐で丸を作る」(1)

dとほぼ同じであるが、場所の指定がないだけにさらにわかりにくい。先図示した図xのような形を連想させるからである。図はあっても、それがどういった地に投影されるかわからないからわからないのである。

教訓五 図が描かれる場所(空間)を描写しないと、わかりにくくなる。

f「最終的には雨滴か蝶の翅の形をしたものが二つ組み合わさっているような形の結び目を作るが、その前に結び目の土台として、二本の紐を紐が収まっている右穴(ハトメの穴)と左穴の間にねじれるようにして、雨滴または蝶の翅の土台となるものを作るのであるが、第一段階と言っていい、この作業は…(後略)」(1)～(3)

私は脳科学についての知識はないが、自分の思考を観察すると、コンピューターでいうストレージのような全記憶から必要な部分だけをメモリのような場所に取り出して、思考していることがわかる。家から大学まで出勤する場合にしても、手前の道を通り空き地でじゃれあう猫を見ながら地下鉄の駅に行くか、もう一本向こうの道を通って、今頃は外の落ち葉を掃いているAさんのおばあちゃんに挨拶して駅に行くかを考えているとき、新橋駅で横須賀線に乗るか東海道線に乗るかを考えていない。だからこそ、考えることができるのである。句点でセンテンスを区切ることと、思考対象を短くすることは別のことであるが、

教訓六 センテンスを短くしないと聞く気がしなくなる。

センテンスを長くすると、どうしても思考対象が長く感じられるからである。

g「まず、片方の紐の方を、手に持って楕円形にゆがめると、雨滴状になったら雨滴の手元に近い側をくっつけられるということで、蝶の翅の一方の形になれるようにして…」(1)

cやfとこのgのようなわかりにくい説明は、考え付いた順に書いているから起こる現象である。

その結果として、各種の文章術の書物^(注8)にあるような、「(いわゆる)主格と述語、修飾語句と被修飾語句が離れる」「接続詞の誤り」「「れる」「られる」を使った不適当な受身や自発の表現」「不要な婉曲表現」「『ことで』など、方法、理由、条件、単純接続など用法が多い曖昧な語句を使用してしまう」…といった悪文が現れる。先の教訓六で述べたように、短いセンテンスを区切って視覚的手順に従って書くべきである。

教訓七 各センテンスは考えた順ではなく、視覚的手順に従って書く

「正直に描こう」と考えて自分の脳の中味を描写するからこそわかりにくくなるのであり、絵を相手に伝えることが出来ればいいと割り切れれば、伝わる説明ができる。

h「右手で雨滴状の輪を作り、左の紐を手前から後ろに回しかける。輪の後ろに回った紐の真ん中の部分を右手の雨滴の下から覗かせるようにして、右手の雨滴の紐を締めて、左も雨滴状の形にする」(4)～(6)

実際にこのようにして靴紐を結んでいる人は多いように思う。しかし、結びやすい結び方と、説明するのが楽な結び方は異なる。この結び方の説明は非常に大変である。2021年の討議では、演習内容を予告しなかった。つまり予習する時間はなかったはずだが、イアンノット^(注9)など多くの結び方が提案された。その結び方の中から説明が易しいものを選んでいたグループは、短時間で良い説明に仕上げていた。

教訓八 複数の方法がある場合、説明しやすい方を採用する。

i「雨滴の紐の結び目側の部分を引っ張るようにして、締め上げる」(6)

確かにこうすると、紐の先端が結び目から抜けることはないだろう。微妙ではあるが、ここまですべて説明することもないかもしれない。解答のように厳密ではないが簡単な方がわかりやすいという場合もあるので記した。

教訓九 厳密な描写よりわかりやすさを優先した方がいいこともある。

もちろん、説明を受ける患者さん次第である。しっかりした人かそうでないかを見極めたうえで説明方法をマイナーチェンジした方がいいこともあるだろう。

k「締め上げて、紐の袴が抜けないようにする」
(6)

同様な表現に、「紐の穂先」「紐の足」(ここまでは、紐の先端のこと)「楕円」(雨滴状の形のこと)「コブ」「団子」(ともに結び目のこと)などがあつた。

教訓十 熟していない表現や古い比喩は使わない

「コブ」という比喩を使うとしたら、「結び目のコブ状のところから紐が抜けないように」と「コブ」という比喩表現を説明しながら使うべきだ。当然の配慮であるが、興味深いことに、一般に説明に使われる言葉や比喩表現には、古めかしい表現が多くみられる。たとえば、糊をつける場所を「糊代」と言い、道の曲折に逆らわずに進むことを「道なりに進む」と言うなどである。若い世代と老人とは共有できる言葉が少なくなっている。若い看護師が老人の患者に説明をして納得してもらおうという観点でも、あるいは、老人の患者の症状の説明を理解するという観点でも特に注意が必要であろう。

6 おわりに

＜柔らかな国語力＞の構築に向けて。

以上みてきたように、今まで学生たちが信じ込んできた説明の方針、「正確に書く」「詳しく書く」「自分の体験や考えを正直にありのままに書く」「相手にわかってもらえるよう具体的に書く」などは、説明の方法や方針として欠陥がある。ところが、小中学校では「説明」という科目が設置されておらず、高等学校の「国語表現」も小論文や実用文、プレゼンテーションの方法などを主たる対象としている。教科内容から抜け落ちているから、教育法の研究が進んでいない。だから、上記のような欠陥や副反応がある説明の方針を大人たちは何気なく生徒に話して、生徒はそれを内面化してしまうのだ。

現代の学生は、学校名を爵位のように一生ついて回る勲章もしくは烙印として意識して、ある者は優越感を、ある者は劣等感を抱いて生活する。しかし、今回のグループワークでは、学業成績、特に大学入試現代文の偏差値的成績がいい人もゼロから表現を工夫しなければいけなかった。一般にいわれている学力が、学力全体のほんの一部でしかないということに学生に気づいてもらえば、望外の喜びである。

大学入試を意識した現実の国語(現代文)の勉強は、鷺田清一や大澤真幸など、大学教授や評論家を書く哲学や思想の抽象的な議論を理解できるかどうかが重要なポイントであり、日常的な言語の運用能力が問われることはない。もちろん、盛り込まれる思想と使用される言語は一体化されていて切り離されない。大澤真幸の思想が日本語一般という容れ物のようなものに入っているのではない。使われている語彙や表現は編み込まれている難解な思想の理解と不可分のものである。したがって、大澤真幸の評論を理解する力は、現代思想の理解力であると同時に難解な語彙や言い回しを

理解するという一種の国語力であるといえよう。しかし、これを仮に＜硬い国語力＞とすると、靴紐の結び方の説明のような日常的な言語を使用した＜柔らかい国語力＞もあるのだ。両者が別物である証拠は、後者には教養レベルによる差がない点にある。たとえば、「幸福は、外在するものではない。主観の中に立ち現れる表象である。」という文章は、教養レベルの高くない人には通じない。「幸せとは心の外にあるものではなく、心の中で起きる出来事だ」と言い換えて初めて通じる。しかし、靴紐の結び方の説明は、通じないものは万人に通じないし、通じるものは万人に通じる。必要とされている力は、＜硬い国語力＞とは明らかに異なる。

＜柔らかい国語力＞は、看護師には特に必要な力である。高校までの国語教育も、論理国語／文学国語などという、思い付きの観念的な分類で済ませるだけではいけない。より実地的な表現法の養成、それも、理解だけではなく実技として本当にできるにはどうしたらいいか。その理論と実践方法を模索するべき時が来ているのだ。

付記

利益相反など研究倫理上の問題はあります。

謝辞

最後になりますが、筆者の拙い写真をもとに、イラストを進んでわかりやすく描き直していただいた、イラストレーター あくつじゅんこさんに感謝いたします。

注1 Opinions and Social Pressure. アッシュの同調実験の記録. <https://www.lucs.lu.se/wp-content/uploads/2015/02/Asch-1955-Opinions-and-Social-Pressure.pdf>

(2021 年 9 月 3 日～11 月 20 日参照)

注2 スミス,JR , ハスラム,SA 編,樋口匡貴,藤島喜嗣訳. 社会心理学・再入門—ブレークスルーを生んだ 12 の研究, 東京, 新曜社, p99, 2017.

注3 本田和子. 異文化としての子ども, 東京, 紀伊国屋書店, p15～22, 1982.

注4 河原和枝. 子ども観の近代-『赤い鳥』と「童心」の理想, 東京, 中央公論社, p8, 1998.

注5 スペルベル,D ,ウィルソン,D. 関連性理論—伝達と認知—, 東京, 研究社出版, p144～145, 1999.

注6 「ブラックボックス」については、「中身がわからない不気味なもの」が語義である。「…コンピュータの世界ではハードウェアやソフトウェアの内部構造やしくみがわからなくても扱える、装置やプログラムのこと。医療の分野でも、中身(病気の原因)がわからなくても問診などから状況を判断して結論づけることを指す。」(『ASCII.jp デジタル用語辞典』)各種百科事典や用語辞典の記述も同じ内容である。

注7 ブラックボックスの諸問題は、下條信輔『ブラックボックス化する現代』東京, 日本評論社, 2017. 特に1～4章に詳しい。

注8 学生に薦めた悪文についての参考文献は、岩淵悦太郎 編『悪文』(第三版)日本評論社, 1979. (角川ソフィア文庫からも全く内容が同じものが出版されている。第一版は、1960 年刊行)、本多勝一『日本語の作文技術』朝日文庫, 1982. (文庫化される以前の単行本の初版は 1976 年)、阿部紘久『文章力の基本 100 題』光文社, 2010. の三冊である。本文で述べたような現代の大学生が陥りそうなポイントを、現代風の例文で的確に記してあるのは、阿部氏の本である。その他、接続詞の使用法の文献として、石黒圭『「接続詞」の技術』実務

教育出版, 2016. を薦めた。

注9 OTOKOMAE/男前研究所. ほどけない
靴紐の結び方『イアンノット』.

[https://www.youtube.com/watch?v=u-](https://www.youtube.com/watch?v=u-NFyB3THpw)

NFyB3THpw (2021 年 11 月 3 日参照)

上記は動画であるが、「イアンノット 結び方」
で検索すると、多くのわかりやすい画像が得ら
れる。